

今週の為替相場見通し(2020年9月28日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		104.00 ~ 105.70	105.56	104.50 ~ 106.50
ユーロ	(ドル)		1.1613 ~ 1.1871	1.1631	1.1500 ~ 1.1750
(1ユーロ=)	(円)		122.54 ~ 123.90	122.78	122.00 ~ 123.50
英ポンド	(ドル)		1.2676 ~ 1.2965	1.2741	1.2600 ~ 1.2850
(1英ポンド=)	(円)	*	133.05 ~ 135.34	134.59	133.00 ~ 135.50
豪ドル	(ドル)		0.7006 ~ 0.7323	0.7028	0.6900 ~ 0.7350
(1豪ドル=)	(円)	*	73.98 ~ 76.40	74.24	73.00 ~ 75.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 松本 奈保輝

(1)今週の予想レンジ: 104.50 ~ 106.50 円

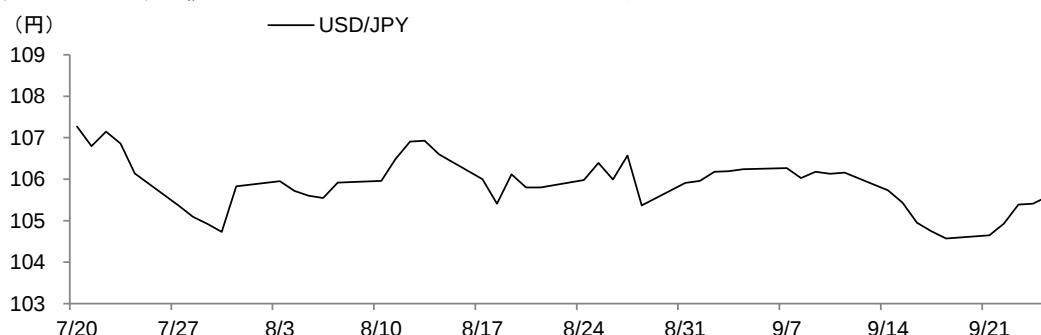
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

今週のドル/円相場は上昇する展開となった。週初21日、104円台後半でオープンしたドル/円は、東京市場連休入りで薄商いとなる中、リスク回避的な円買いが強まると、一時週安値となる104円ちょうどまで値を下げた。その後は特段材料がない中、円の先物市場で大きな売りが持ち込まれているとの報道や米株価の軟調推移を受けドル買いが強まると、104円台後半まで急伸した。22日は、前日の欧米株安の流れを受けてアジア株が弱含むと、ドル/円は104円台前半まで下落するも、欧州での新型コロナウイルスの感染拡大のヘッドラインから再びリスクオフのドル買いが強まる展開となって、ドル/円は105円台に乗せた。23日には、株式市場が徐々にマイナス圏に下落する動きや米金利上昇も後押しし、ドル円は105円台半ばまで上昇。24日は、前日の流れを引き継ぎ、ドル/円は海外時間に105円台半ばまで再び上昇し、終日、堅調な値動きが続いたが105.50円近辺では上値重く推移した。25日は、月末、期末、一部米企業の年度末要因のドル買いが意識される中、株式市場は寄り付き軟調であったことからリスクオフのドル買いが更に強まり、ドル円は一時週高値の105.70円まで上昇したが、株式市場が切り返す展開にドル買いが後退する。午後は、週末を控え105.60円付近での閑散な推移が続き、105.56円で越週した。

今週のドル/円相場は緩やかに上昇する展開を予想。欧州圏における新型コロナウイルスの感染再拡大を受け市場ではリスクオフムードによるドル選好の流れが続いており、今週もその流れを引き継ぎドル買いの地合いが続きそうだ。またラガルドECB総裁からのユーロ高けん制発言により、ユーロへの下押し圧力が継続しそうなことがドル買いの支えとなりそうだ。一方、今週は米9月雇用統計をはじめ、いくつか米国の経済指標の発表が予定されているが、市場予想比大きく悪化した場合はリスク回避的なドル買いは縮小する可能性があることや、足元、急速に円高が進んでいたこともあって106円台では実需の売りも意識されることから、ドル上昇のペースは緩やかなペースになると予想する。尚、米国では追加財政支援策が10月2日の議会休会前に合意に至るかどうかも注目材料だ。重要指標としては30日(水)に米4~6月期GDP・確報値、米9月ADP雇用統計、10月1日(木)に米8月PCEコアデフレーター、米9月ISM製造業景気指数、2日(金)に米9月雇用統計の発表が予定されている。

(3)先週までの相場の推移

先週(9/21~9/25)の値動き: 安値 104.00 円 高値 105.70 円 終値 105.56 円



2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 上野 智久

(1) 今週の予想レンジ: 1.1500 ~ 1.1750 122.00 ~ 123.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は下落する展開。週初21日、1.18 台前半でオープンしたユーロ/ドルは、序盤に週高値となる1.1871 をつけるも、ドル買い地合いが継続する中、ラガルドECB 総裁の「ユーロ高が物価の下押し圧力」との発言もあり1.17 台前半まで下落。翌22 日はジョンソン英首相が「コロナの制限措置が6 か月続く公算」と発表したことで対欧州通貨でドル買いが優勢となり、ユーロ/ドルは1.16 台後半まで値を落とした。23 日も米株式市場が軟調に推移するなど、センチメントに好転が見られない中で、ドル買い地合いが継続。欧州の製造業PMI の弱い結果をあり、ユーロ/ドルは、1.16 台半ばまで続落。24日、ユーロ/ドルは1.16台前半をつけた後、米株式市場が徐々に上昇する動きを受けて1.16 台後半まで回復するも勢いは続かず。翌25日は欧州でのコロナ感染再拡大の懸念や軟調な欧州株の動きを受けてドル買い優勢となると週安値である1.1613をつけた。結局1.16台前半で超週している。

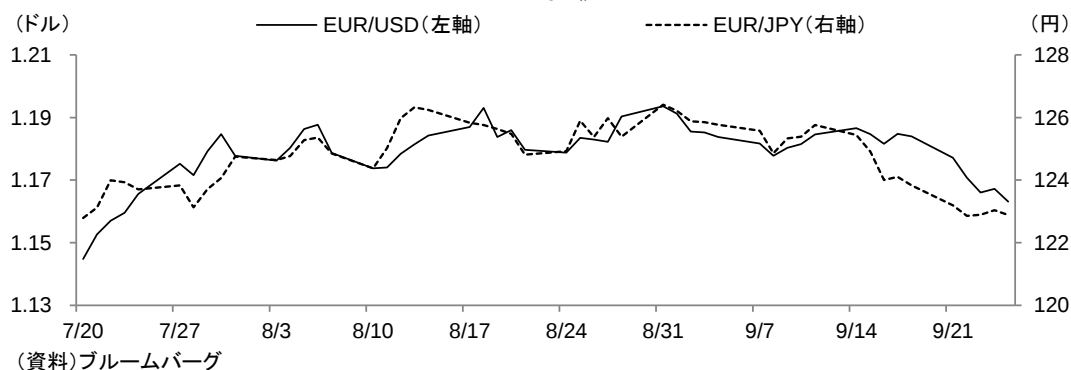
今週のユーロ/ドル相場は基本基調としては上値の重い展開か。5月後半から続いていたユーロ/ドルの上昇基調であったが、足元は8月末をピークに軟調な推移に転じている。先進国の中では比較的、早期にコロナ感染のピークアウトをつけたことで、資金が流れた格好だったと推察されるが、欧州圏での新型コロナの感染再拡大、そして再ロックダウン(もしくは準ずる制限)への懸念といった材料での巻き戻しが起きている状況。混迷を極めるブレグジットの動向に関しても29日以降に交渉がなされるようだが、楽観的な材料が出てくる蓋然性に乏しいと考えている。前述のトピックスに関して、相場の分岐点となるような材料はおそらく出てこないと考えており、基本的には軟調な相場つきを想定している。木曜日以降に米重要指標の発表が行われるが、コロナや大統領選などの不確定要素が大きい中で、イベントの相場観濃度は決して大きくないだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/21~9/25)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1613 高値 1.1871 終値 1.1631

(対円) 安値 122.54 高値 123.90 終値 122.78



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1)今週の予想レンジ: 1.2600 ~ 1.2850 133.00 ~ 135.50 円

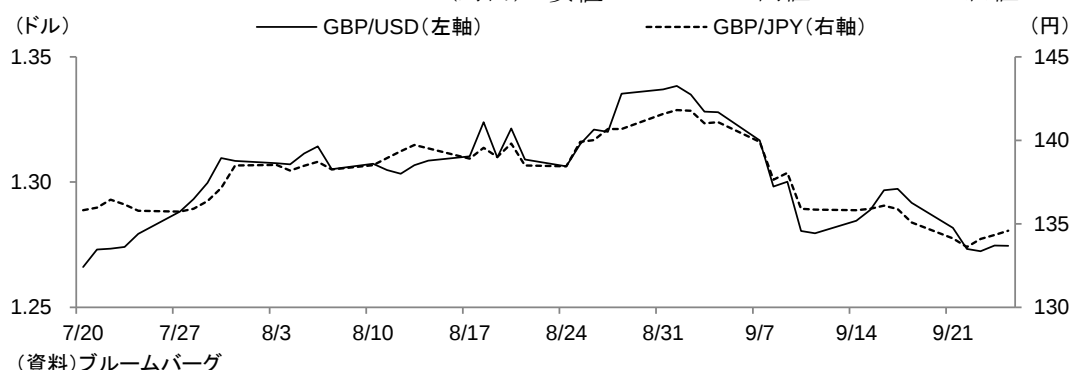
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドル、対円で約8週間ぶりの安値水準における膠着。週明け21日には明確に水準を切り下げたものの、その後は方向感に乏しい横這いに終始した。週明け早々のポンド安は、ユーロ安と並行した欧州通貨売りの一環と思われ、その背景には欧州株の急落があった。本邦が連休で休場となる中、アジア株全般も軟調に推移していたが、欧州株が朝方から広範な急落を見せた背景には、欧州における新型コロナ罹患患者数の急増に対する懸念があった。22日には、ジョンソン英首相が「可能な限り在宅勤務推奨」「マスク着用義務の範囲拡大と罰則強化(罰金増額)」「レストラン、バーなどの営業時間短縮(22:00閉店)」などといったコロナ封じ込め強化策を発表、一連の策の「今後6か月継続を覚悟すべき」と述べた。同日、英中銀ベイリー総裁は、「マイナス金利導入に向けた技術的準備には相応の時間を要する」と述べた。この発言は、前週の英中銀金融政策委員会後に「(マイナス金利導入の実務について)英健全性規制機構(PRA)との調整」を指示したとする発言からは、一歩、腰の引けた内容と受け止められた。実際、英短期金利先物市場は、この間、明確にマイナス金利導入の織り込みを後退させたが、上述、金融政策委員会後の発言を受けて大きく売り込まれたポンドの反発は極めて限定的にとどまった。24日には、スナク英財務相が、例年10月に行われていた「秋季予算声明」を前倒して発表。コロナ対策として実施されてきた企業向け融資や特定産業分野に対する付加価値税率引き下げの延長などの追加対策を発表したが、通貨市場の反応は限定的にとどまり、ポンドは方向感のない横這いのまま週の取引を終えた。

今週の英ポンド相場は、方向感を欠いた軟調気味の横這いを予想。引き続きコロナ禍の強い影響下にある現在の通貨市場は、主にふたつの意味で方向感を見つけ難い状況にあると考える。ひとつめは、新型コロナの影響は世界共通であり、その濃淡やタイミングの差こそあれ、国や地域によって決定的な差異が出難いこと。これは、通貨市場が国(通貨)ごとの相対的強弱を取り引きする相場であることに鑑みて、非常に重たい事実と思われる。もうひとつは、主要国の追加緩和余地が軒並み限定的に陥った状況で、金融政策の主軸が、「言葉の綾」になってきていること。つまり、実際のアクションよりも、各国中銀首脳の発言のひとつひとつに、時に過剰とも思われる反応を取らざるを得ない環境にあることだ。17日の英中銀ベイリー総裁の「PRAとの調整」発言に急落したポンドが、22日の「時間が掛かる」発言に僅かな反応しか見せなかった事実は、ポンド相場において、売り圧力の方が買い圧力よりも強い可能性を示唆していたのではなかろうか。こうした環境下、世界の基軸通貨であるドルを預かる米連銀は、インフレの誘導目標上振れを許容する姿勢(オーバーシュートコミットメント)や、中銀の(ある意味恣意の働く)予想ではなく、実際の経済指標に基づく判断など、様々な言説を投じて緩和的金融政策運営の長期定着を強調してきた。これ以上、米連銀金融政策の先行きに鳩派的(緩和志向的)になり得ないところまで来て、シカゴ連銀エバンス総裁が、22日、「平均2%インフレ到達前の利上げは可能」などという発言をしたのは非常に興味深い。米連銀とて、手探りで今後の金融政策の落ち着いたところを探っている事実の証左と思われるが、仮に金融市場が米連銀の超緩和的政策運営の長期定着を既に織り込んでしまっているのだとしたら、目先、その修正の影響が出易いのは、ドル反発方向になる可能性の方が大きいのではなかろうか。

(3)先週末までの相場の推移

先週(9/21~9/25)の値動き: (対ドル) 安値 1.2676 高値 1.2965 終値 1.2741
(対円) 安値 133.05 高値 135.34 終値 134.59



4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 山口 朋子

(1) 今週の予想レンジ: 0.6900 ~ 0.7350 73.00 ~ 75.50 円

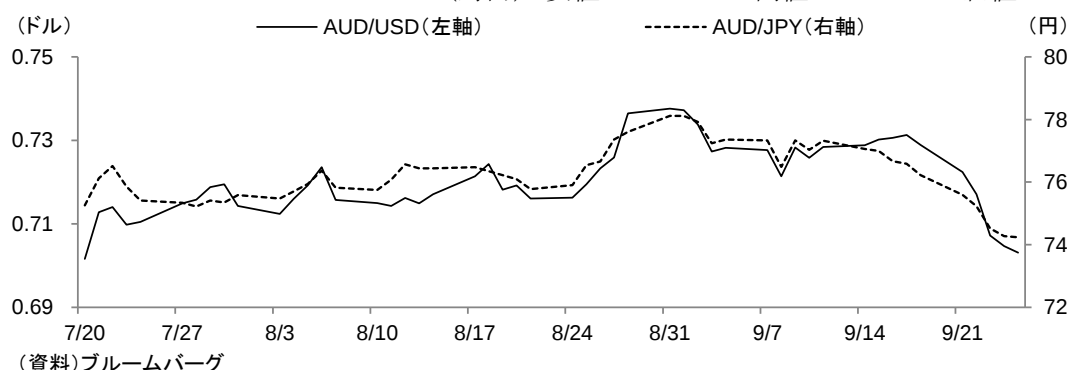
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、大幅下落を記録。21日、豪ドルは0.7310・豪ドル/円は76.19円水準と週高値圏でオープン。欧州でコロナ感染者が再び増加していることや、複数の大手銀行によるマネーロンダリング関与に関する報道を受け、欧米株が下落すると、リスク回避の動きから週初から豪ドルは売り優勢の展開となった。翌22日には豪準備銀(RBA)のデベル副総裁は講演で、雇用とインフレ率の目標達成に向けて精査している政策手段のオプションに、国債買い入れの年限長期化、為替介入、政策金利引き下げ、マイナス金利導入の4つ選択肢について言及。これを受け、豪州地場銀行大手が、RBAが政策金利と3年物国債利回りの誘導目標を10月か11月にそれぞれ0.25%から10ベースポイント引き下げるとの見通しを示し、追加緩和への思惑が広がった。23日にも利下げを予想する声が聞かれ、さらに発表された豪8月小売上高・速報値が前月比4.2%と大幅な落ち込みを記録したことで豪ドルは大きく売られた。23日の海外時間に米金融当局者が相次いで追加財政支援の必要性を強調するコメントに、米株価が下落。リスク回避ムードも豪ドルの下げに拍車をかけ、24日には豪ドル/円は約2か月半ぶり安値となる73.98円まで下落した。その後、ムニューシン米財務長官が追加景気対策の妥協案でペロシ下院議長と協議を再開する意向だと伝わると、米株価が反発し、豪ドルは一時買い戻された。しかし、25日には再び豪ドル売りの展開となり、豪ドルは0.7006まで下落した。その後は下値圏での推移が継続し、豪ドル0.7030・豪ドル/円74.20円近辺で越週となった。

今週の豪ドル相場は来月6日のRBA理事会での決定への思惑に振られる展開を予想。22日のデベル副総裁の講演で、追加緩和策について言及。為替介入に関しては、現在の豪ドルがファンダメンタルズにほぼ沿っていることから、現時点では効果は不明確。また、マイナス金利に関してもその効果に関して実証的な根拠が揃っていないと述べた。これらのオプションに関して「効果が不明」とのスタンスはこれまで通りだったものの、選択肢を精査しているとのコメントから追加緩和への憶測が高まっている。22日、23日と豪州地場銀行は政策金利と3年物国債利回りの誘導目標の予想の引き下げ予想を発表している。ただし、25日には政策を据え置くとの見通しを示す銀行もあり、国内でも見方は分かれている。今週30日(水)に発表される8月住宅建設許可件数や2日(金)の8月小売上高の結果を受け、追加緩和観測が強まると豪ドル売りは継続するだろう。一方で、10月の利下げは見送りとの思惑が強まれば、豪ドルが買い戻される可能性もある。ただし、欧州における新型コロナウイルスの感染拡大で安全資産としてのドル買いが活発化している。豪ビクトリア州での新型コロナウイルスの新たな感染者数は先週3日連続で20人を下回っており、ロックダウンの効果により感染拡大が鎮静化している。ただし、世界的な感染拡大を背景としたリスク回避の動きが継続すると予想され、豪ドルの重しとなるだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/21~9/25)の値動き: (対ドル) 安値 0.7006 高値 0.7323 終値 0.7028
(対円) 安値 73.98 高値 76.40 終値 74.24



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。